資料４　山内委員ご提出資料

京都市消防団の小型ポンプ訓練

京都市消防局

京都市消防団の概況

・管轄人口　約１４６万人
・管轄面積　約８２８㎢
・１１消防団
　２０５分団（機能別分団を除く）
・消防団員数（令和３年４月１日現在）４，４１０人
　うち女性　５２５人
　うち学生　２１２人

京都市オリジナルの操法訓練等

昭和３２年～　各地元で操法等の大会（査閲）を開催
５１年～　消火栓操法等の市大会（査閲）を開催
平成　２年～　応用操法としてトランシーバーを導入
９年～　大会で実施する操法を消火栓操法から小型動力ポンプ操法へ変更
１８年～　小型動力ポンプ操法に分岐管を導入
２７年～　操法に準じた実践的な放水訓練を導入
２８年～　放水訓練時の安全靴着用を開始

市内の全分団が操法に準じた訓練を毎年実施している。

（参考）消防団員の平均年齢
全　国　４１．９歳（令和２年４月現在）
京都市　５０．１歳（令和３年４月現在）

小型ポンプを用いた訓練
全国と京都市の違い

根拠

	全　　国	京　　都　　市
規　定	消防操法の基準 （総務省消防庁告示） 第４章　小型ポンプ操法	京都市消防及び救助操法 に関する要領（通達） 京都市消防団の小型動力ポンプ操法
実施要領	全国消防操法大会　操法実施要領	京都市消防団総合査閲 小型動力ポンプの実放水訓練要領

	全　　国	京　都　市
使用機材の違い	・ホース　６５㎜×３本 ・分岐管　なし ・トランシーバー　なし	・ホース　６５㎜×２本・５０㎜×１本 ・分岐管　使用 ・トランシーバー　使用
服装の違い	運動靴等，脚絆	安全靴（踏抜き防止・耐圧迫性能等を有する）
吸管延長の人員	２　名	３　名
筒先保持の人員等	１人（指揮者）で保持 筒先交替　指揮者→筒先員	指揮者以外の２人で保持 筒先交替　なし
放水開始等の伝令	伝　令　員	トランシーバー（指揮者）

写真１

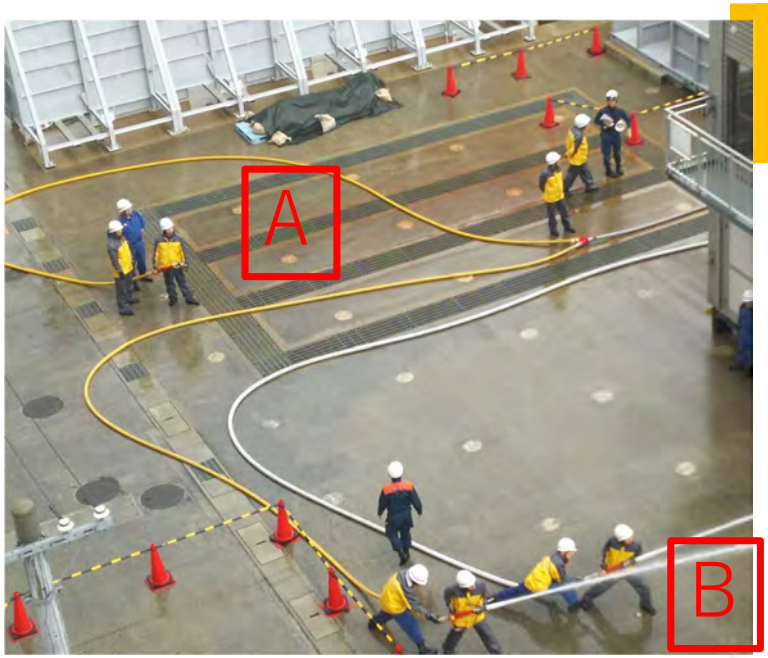


写真２

分岐管

消火活動時にホースへ
結合し使用する器具

使用目的

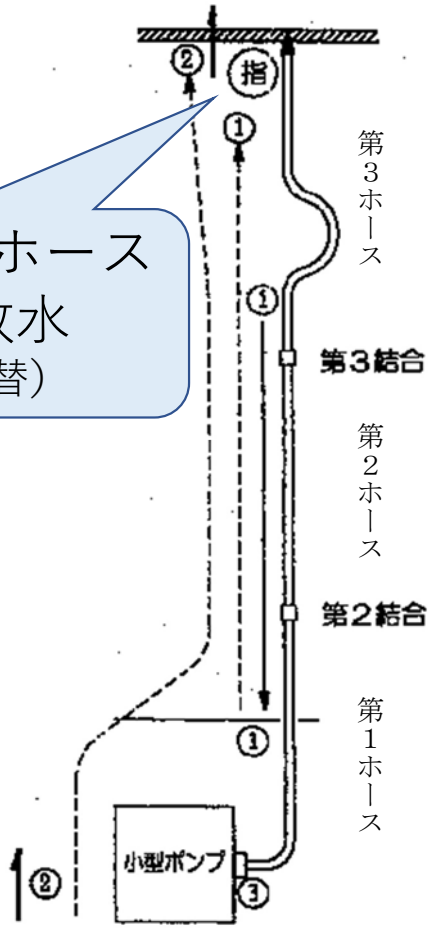
- ２口放水
- 放水一時停止
- 部署移動
- 圧力抜き

消火活動で重要な器具

大会における訓練　全国版と京都市版の違い（図解）

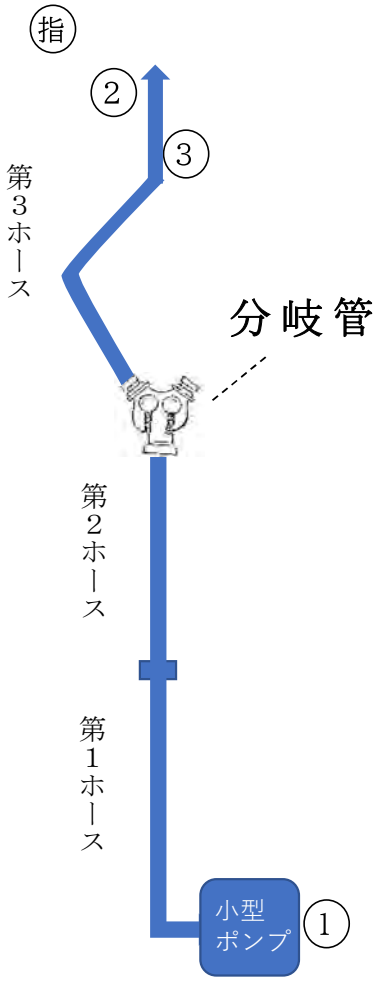
全国版

指揮者が第３ホースを延長し放水
（後に筒先交替）



大会における訓練　全国版と京都市版の違い（図解）

京都市版



京都市版　指揮者の動き

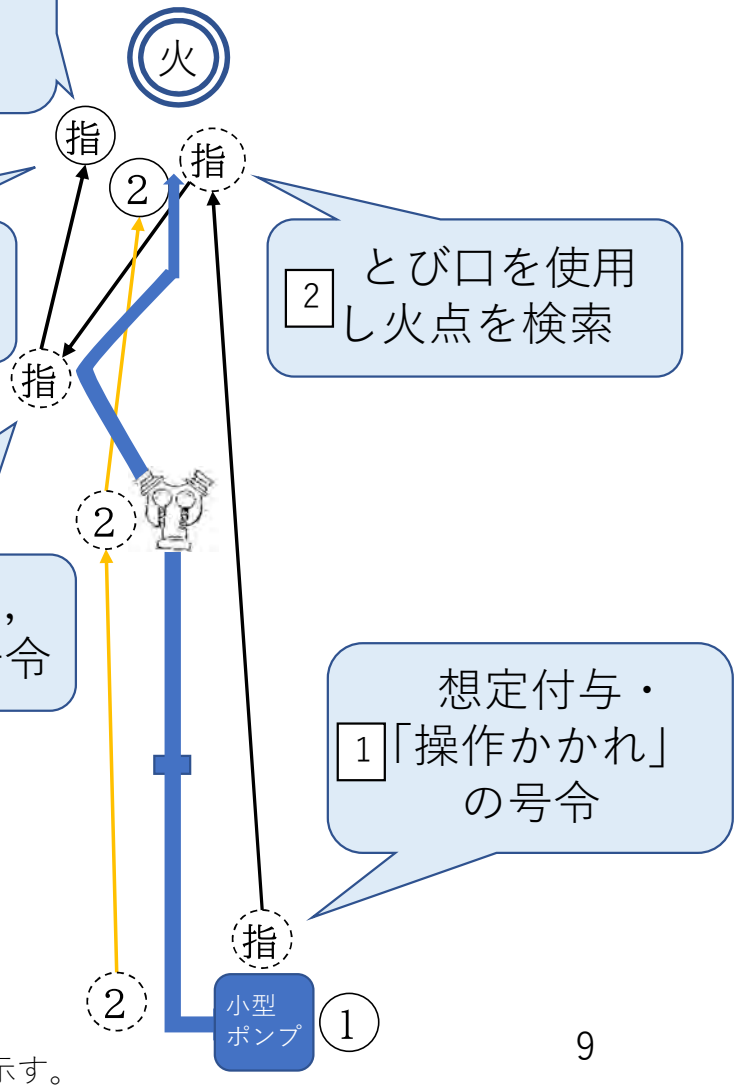
4「筒先位置」と号令

3「分岐管使用，ホース１本延長」と号令

5 １番員へ「放水始め」を送信
※トランシーバーを使用
安全管理

4 ２番員へ
「筒先位置」と号令

3 ２番員へ「分岐管使用，
ホース１本延長」と号令



2 とび口を使用
し火点を検索

想定付与・
1「操作かかれ」
の号令

※　箱書き内の数字は，実施順序を示す。

トランシーバー

離れた場所にいる団員間の交信に使用する。

災害現場ではデジタル簡易無線（写真１）を使用する。

災害現場で使用する無線の混信を避けるため，訓練ではトランシーバー（写真２）を使用している。

写真１

写真２

活動靴（安全靴）

災害現場活動で使用する靴
踏抜き防止・耐衝撃・耐圧迫性能を有する。

全国消防操法大会では，実施要綱で「靴は操法に支障のないものとする」と定められている。
運動靴が使用されることが多い。

京都市版訓練の特徴

京　都　市　版	効　　果
指揮者が指揮・安全管理に専念	適切な状況判断
分岐管・５０ｍｍホースを使用	災害現場活動に即した訓練
トランシーバーの活用 （伝令員が不要）	消防団員の負担軽減
安　全　靴　の　着　用	災害現場と同様の服装 安全性を重視

装備・訓練の改善や先進的機器等の積極的な活用

総務省消防庁「消防団を中核とした地域防災力の充実強化に向けた重点取組事項について」（令和元年12月13日消防地第228号）から抜粋

一方、近年の災害は多様化、大規模化していることから、消防団員の数の確保とともに、装備・訓練の改善や装備に関する先進的な機器等の積極的な活用等による消防団員の更なる質の向上を通じて、消防団の災害対応力の向上を図ること。

装備・訓練の改善は公務災害の発生防止も図れる。

京都市版訓練の特徴

災害現場活動に即する

消防団員の負担軽減

確実性と安全性を重視

毎年５～６月に分団単位で訓練を実施する。
消防団員から「新入団員の基礎的な動作の習熟に役立つ」との声も多い。
その一方で，「激しい訓練による心身の負担に加え，準備期間が長期に渡ることによる，時間的な負担が大きい」との意見もある。